

『英語ノート（試作版）』の語彙の特徴－品詞と意味の観点から－¹

神谷昇^{a)}・長谷川信子^{a)}・町田なほみ^{a)}・長谷部郁子^{b)}
a) 神田外語大学 b) 学習院女子高等科

本稿は、2011年から公立小学校で必修化される英語活動の一定基準を示すために作成された『英語ノート（試作版）』に現れる語彙を言語学的観点から、その特徴を考察し、それを基盤に小学校での英語活動で可能となる英語のカタチを明らかにするものである。まず、早期英語教育の分野におけるこれまでの語彙研究を概観し、早期英語教育用語彙リストを比較した上で、収録語彙の特徴をとらえる。次に『英語ノート（試作版）』の語彙のうち、児童の語彙に着目し、それらの品詞割合を分析し、先行研究との比較に加え、成人向けの語彙との比較も併せて行い、相違点を検証する。さらに、『英語ノート（試作版）』出現語彙のうち、先行研究で示された早期英語教育用語彙リストと大きく異なる割合を示した動詞に焦点を当て、その意味タイプの分類、有生物主語と無生物主語の割合について言語学的見地から考察し、その特徴をとらえ、『英語ノート（試作版）』に提示されている「英語の特徴・カタチ」を、英語の体系の観点から明らかにする。

1. はじめに

文部科学省は、2002年に『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を掲げた後、小学校の英語活動支援を明示し、2008年8月発行の『新小学校学習指導要領解説外国語活動編』において、2011年から公立小学校の5・6年生を対象

¹ 本稿は、神谷他（2008）（口頭発表）を基に加筆・修正したものである。発表の際には参加者の方々から有益なコメントをいただいたことに感謝申し上げます。言うまでもなく、本稿の誤りは筆者の責任である。なお、本稿の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（研究代表者：神谷 昇）の助成を受けて行われたものである。

に、週1コマ英語を原則として扱う「外国語活動」の必修化を盛り込んだ。

全国の公立小学校では、既に総合的な学習の時間などを利用して英語活動を行っており、その実施率は、文部科学省の「平成19年度小学校英語活動実施状況調査」²では97.1%に上がることが報告されている。しかしながら、この高い数字は、単に英語活動を行ったか否かを示す割合であり、実施回数、総活動時間数、その活動内容は千差万別である。年間における総活動時間数だけを見ても、1～3時間程度の小学校もあれば、71時間以上の実施校があり、小学校間、地域間の差が非常に大きいことは明らかである。

しかし、2008年3月の『新小学校学習指導要領』の告示を受け、2011年からの全国一律の英語活動の導入の実施が現実化するに伴い、2008年度には、これを円滑に進める一つの試みとして、活動内容・範囲・レベルに一定の基準を示す『英語ノート（試作版）』が作成され、全国の拠点校約550校に配布された。さらに2009年4月には、『英語ノート』改訂版³とデジタル版が全国の小学校に無償配布が予定され、2011年での完全実施に向けて、実質的な小学校での英語指導が始まると言える。

文部科学省は、『英語ノート』は教科書ではなく、必ずしも使用する必要はないとの見解を示している。しかし、西垣・中條（2008）で言及されているように、『英語ノート』は、小学校の外国語活動で扱われる言語活動と言語材料を実質的に

² 本調査は、平成20年3月文部科学省から「平成19年度小学校英語活動実施状況調査及び英語改善実施状況調査（中学校・高等学校）について」として報道発表されたものであり、より詳細は、http://www/mext.go.jp_b.menu/houdou/20/03/08031920/002.htm を参考にされたい。

³ 本研究では、『英語ノート：第5学年、第6学年』（試作版）およびその「指導資料」を基に調査・分析を行っており、2009年4月に配布予定の『英語ノート』が対象とはなっていない。改訂の度合いは大きくないと伝えられているが、本稿での研究内容が改訂版にも当てはまるか否かは、今後の調査課題としたい。

は規定していると考えられ、現実的にはそれが今後の英語活動の拠り所となる可能性が高い。特に ALT や早期英語教育の専門家からの協力が多くは望めない地域や小学校においては、教員の英語を教えることへの知識ならびに経験が十分でないなら、『英語ノート』（および、その指導資料）が果たす役割は必然的に非常に重要となろう。

これらの観点から、『英語ノート（試作版）』の特徴を熟知し報告することは、2011年からの英語活動を円滑かつ有意義なものとするための第一歩であると考えられる。

言語（英語）には様々な側面があり、その教育についても焦点は一通りではないことは、これまでの我が国における「英語教育」の変遷を振り返っただけでも明らかである。『英語ノート（試作版）』については、すでに、英語活動の基本的考え方、各レッスンでの具体的な導入方法、指導技術、様々な副教材など、多くの論考がなされ、多局面からの評価・論評も数多い。しかし、『英語ノート（試作版）』に提示されている語彙や文法、句型などに関する調査は、筆者らの知る限りほとんどなされていない。同様に、この『ノート』を用いて指導する際に「指導者が使う語彙や句型」（同ノートの「指導資料」に使われている表現）についても、英語の体系に言及して考察しているというような論考は見あたらない。この事実は、「小学校での外国語（英語）活動」の目的が「英語の知識の導入」にあるのではなく、「英語に慣れ親しむ」⁴ことにあることと関係があると思われるが、小学校での英語を土台に中学校では、英語の知識も含めて英語を学ぶことを考えると、『英語ノート』により、小学生の時期にどのような語彙が導

⁴ 具体的には、『新小学校学習指導要領』第4章「外国語活動」第1目的に、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と記されている。

入され、どんなタイプの文に触れることになるのかを、英語学や言語学（つまり、英語という言語体系全体）の観点から明らかにすることは、中学校およびそれ以降の英語教育との連携を考える上でも、また、小学校での英語活動を効果的に支える小学校での（ALTを含む）教員や指導者を養成するにあたって重要であろう。

こうした観点から、本論文では『英語ノート（試作版）』の語彙に的を絞って調査し、その結果を報告することとした。以下、先ず、第2節で、筆者らが、『英語ノート（試作版）』の考察以前に行った早期英語教育における語彙とそのリスト（早期英語用語彙リスト）に関する研究（町田他(2008)）に言及し、子ども用語彙の特性を概観する。第3節ではその早期英語教育用語彙リストに照らして、『英語ノート（試作版）』に出現する語彙がどのような特徴を持っているのか、品詞の観点から調査した興味深い結果を報告する。『英語ノート（試作版）』は、これまでの子ども用語彙リストと比較しても、また、成人向け語彙リストとの比較においても、品詞の割合を調べると、名詞の割合が高く、動詞の割合が低いのである。また、動詞については出現数が極端に低いが、それらのほとんどは他の子ども用語彙リストと共通しているのである。その結果を受け、第4節では『英語ノート（試作版）』に出現する語彙の中で、他の早期英語教育用語彙リストとの高い重複度を示した動詞に焦点を当て、これらの動詞がどのような意味タイプであるか、どのようなタイプの文が導入されているかを言語学の観点から考察する。そして、最後に第5節で、『英語ノート（試作版）』に出現する語彙の特徴と使用されている構文と動詞の意味をまとめ、『英語ノート』により到達できると思われる英語力、「英語のカタチ」をある程度明らかにする。

2. 早期英語教育における語彙研究

本節では、早期英語教育における国内外の語彙研究に焦点を当て、様々な観点からの語彙資料により選定された子ども用語彙リストの特徴を概観する。また日本国内での先行研究で提示されてきた早期英語用の語彙リスト3種の共通語彙を基に得られた語彙リストを分析し、その特徴を探ることとする。

2.1 海外での語彙リスト研究

これまでの早期英語教育における語彙研究の一つに、Rixon (1999)の研究がある。Rixonは、イギリスの大手出版社から刊行され国際的に普及している7種のコースブックを分析し、7種のコースブックには総数889語が出現するが、5種以上のコースブックに共通する語はわずか8分の1程度(113語)⁵しかないことを報告している。つまり、多種多様のテキストに共通して出現する語彙は少なく、早期英語教育で導入される語彙は、扱うトピックによって異なる語彙が導入されると推測できるのである。しかし、異なるテキストであっても共通している語彙があることから、Rixonはそれらの意味領域を分析し、共通語彙は子どもの関心が高いと考えられているもので、教室という環境下での英語学習に役立つ語彙であると述べている。

次に、日本における語彙リスト研究を3つ紹介する。

2.2 国内での語彙リスト研究1：石川(2006)

日本における早期英語教育のための語彙リストを提示した先行研究成果の一つは、石川(2006)によるKUBEE1850と名付けられた1847語を収録した語彙リストである。このリストは、異なる観点から選定された児童の語彙とかかわる数多くの言語資料を用いているのが特徴的である。さらに、これら

の資料から、児童が触れる可能性のある語彙という観点だけでなく、L1・L2にかかわらず児童の言語活動に表出すると思われる語彙をコーパス言語学の手法を用い 160 万語以上抽出した上で、子ども用の語彙の選定を行っている。⁶つまり、実際に日本における小学校での英語活動に導入される（されている）かどうかの観点ではなく、児童期の母語（英語母語話者、日本語母語話者）の語彙の観点も含め、その時期の子どもの言語活動に求められる語彙という視点からのリストとなっている。

2.3 国内での語彙リスト研究 2：中條他（2006）

中條他（2006）が提示したリストは、KUBEE1850 とは全く異なる観点から編纂されている。この研究では、中学校用英語検定教科書会社 5 社から刊行されている小学生用英語活動テキストとその指導書を言語資料とし、これらに出現する語彙のうち 5 社に共通して出現する 267 語を明確にし、さらに 2 社以上のテキストに出現する語 1373 語をリスト化したものである。こうしたテキストの使用普及率は定かではないので、確定的なことは言えないが、こうしたテキストが、独自の英語テキストを開発することが叶わない多くの小学校で用いられているとするなら、このリストには、日本における英語活動で導入されている可能性の高い語彙がリスト化されていると言えるかもしれない。

2.4 国内での語彙リスト研究 3：神田外語大学における研究

神田外語大学では、2004 年から早期英語教育プロジェクトを

⁵ つまり、早期英語教育において、扱うトピックにある程度の指針がなければ、核となる共通語彙を抽出することは難しいのである。日本国内の研究で提示された共通語彙の特徴については、2.5 に述べる。

⁶ 語彙リストの作成過程については石川（2006）に具体的手順が述べられている。また石川（2006）で提示された語彙リストでは、品詞、JACET レベル、意味分類の付与はされていなかったが、その後開発が進められ、これらの付与された語彙リストが <http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kubee/html> にて公開されている。

立ち上げ⁷、早期英語活動において語彙が重要な役割を担うこと（Cameron, 2001; McKay, 2006）を認識した上で、日本での活動状況に適した語彙リスト開発⁸のために様々な試みを行ってきた。

本プロジェクトで開発した早期英語教育のための語彙リスト（以下 KUIS 語彙リストとする。）は、国際的に広く使用されているコースブック 2 種、*Let' Go* と *SuperKids*、の導入期レベル（各シリーズの前半部分）⁹の語彙をデータ収集の基本的資料とし、子どもの語彙習得の観点（山本, 2005、今井・針生, 2007）を参考に、主に、内容語を中心に、名詞（固有名詞を除く）、動詞、形容詞、副詞、前置詞の 5 品詞に属する語彙を抽出しリスト化している¹⁰。その後、指導者のみを使用する語、抽象語など児童にとって困難と思われる語を削除し、最終的に 956 語が選定されている。

KUIS 語彙リストでは、前述の語彙リストとは異なり、各

⁷ より具体的には、本プロジェクトは、①文部科学省所管の独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターが実施する研究開発プログラム「脳科学と教育」（タイプ II）委託研究「言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究」（研究代表者：萩原裕子、首都大学東京）のサブ研究領域『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』（研究機関代表者：長谷川信子）に属する研究、②日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（2004-2006 年度、課題番号 16320075; 研究代表者：小林美代子）③同補助金基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（2007-2009 年度、課題番号 19320085; 研究代表者：小林美代子）④日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C)『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（2008-2010 年度、研究代表者：神谷 昇）から構成されている。

⁸ 本リストは、上記プロジェクトの①の研究成果である。

⁹ *Let's Go* (Oxford University Press)は全 7 巻のうち Starter level ~level 4 を、*Superkids* (new edition) (Longman Asia ELT)は全 6 巻のうち level 1~4 を使用した。

¹⁰ KUBEE1850 や中條リストでは、こうした内容語に加え、固有名詞や機能語（冠詞、接続詞、代名詞、be 動詞、助動詞、疑問詞など）などもリストに含まれている。内容語を中心とした KUIS 語彙リストには、固有名詞は導入されるトピックへの依存度が高いことから、機能語は逆にトピックとの関係は薄く、むしろ、文法や構文と結び付き、どのテキストでも導入される可能性が高いことから、これらを含んでいない。しかし、これらは、別表として収録してあり、教室での英語活動などへの便宜が図られている。詳細は町田他（2008）に資料として明示してあるので参考にされたい。

語をリスト化したのみならず、コースブック内での使用法に基づいた品詞と独自の意味範疇が付与されている。品詞の付与には、同じ単語であっても異なる品詞の場合、その習得は一樣でないこと(Hindmarsh, 1980)を考慮し、同じ語が出現しても品詞が異なる場合は異語として扱っている。意味範疇の付与は、乳幼児の語彙項目を示した研究(小椋, 2000)を基に就学期児童の言語発達を考慮して、この語彙項目をさらに細分化した独自の語彙項目を付与している。

さらに各語には、海外早期英語教育教材、海外成人英語資料、国内早期英語教育教材、国内中学校用検定英語教科書、国内成人英語教育教材の情報が加えられ、言語資料間の比較を容易にする試みがなされた汎用性の高い語彙リストとなっている¹¹。

2.5 先行研究で提示された語彙リスト比較

前述の先行研究(KUBEE1850 リスト(石川, 2006)、中條他リスト(中條他, 2006)、KUIS 語彙リスト(町田他, 2008))にて提示された語彙リストを比較した結果は図1¹²(次頁参照)に示したが、それらに共通する語は455語であることが分かった。これらの先行研究で提示された語彙リストは、それぞれが異なる言語資料を基としたにも関わらず、約450語が共通しており、これらの語彙は早期英語教育での語彙指導上「核」となる語と判断しても良いのではないと思われる。本研究にあたって『英語ノート(試作版)』に出現する語彙の特徴を探るには、これらの語のみを分析するにとどまらず、

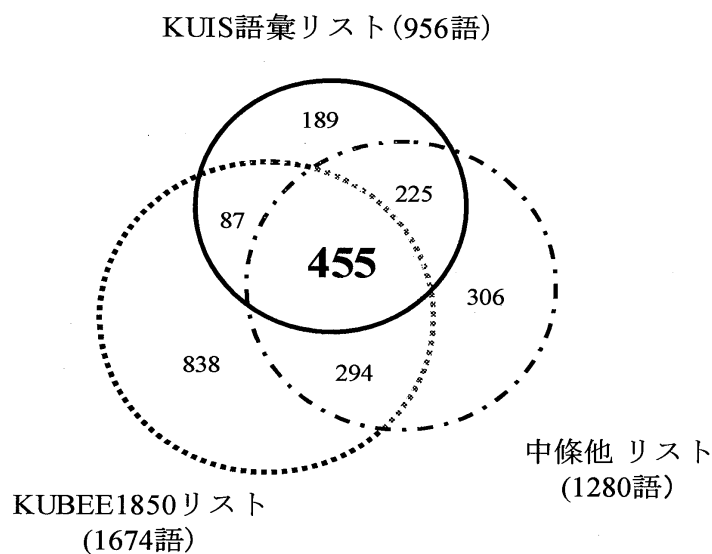
¹¹ KUIS 語彙リストの開発過程とその特徴、有用性については、町田他(2008)に詳細を述べてあるので参考にされたい。

¹² KUIS 語彙リストは、名詞・動詞・形容詞・副詞・前置詞のみを抽出してあるため、共通語彙数を算出するに当たり、他の先行研究で示された語彙リストも KUIS 語彙リストに収録されている品詞のみとした。その結果、KUBEE1850 の収録語彙数は1674語に、中條他の語彙リストは1280語となった。但し、中條他の語彙リストは品詞情報の提供がないため、適切と思われる品詞を付与して共通語彙数を算出した。

他のリストの共通語彙との比較を行うことで、より深い理解が得られるものと考える。

以下に『英語ノート（試作版）』に出現する語彙を他のリストとの比較の観点から行った分析結果を示す。

(図 1) KUBEE1850 リスト、中條他リスト、KUIS 語彙リストの比較



3. 『英語ノート（試作版）』に出現する語彙特性の分析

本節では、第2節における子どもの語彙を踏まえ、『英語ノート（試作版）』の語彙の特徴を述べる。¹³

3.1 『英語ノート（試作版）』データベース作成過程

本研究では、『英語ノート（試作版）』に出現する英文のうち、児童の語彙の特徴を明白にすることを主たる目的とするため、全英文から「扱う表現」、「CD スクリプト」、「児童の活動」

¹³より正確には、『英語ノート（試作版）』は生徒向けのテキストのみを指すのかもしれないが、それらにはほとんど英文は書かれていないことから、分析の対象としているのは、生徒用の2冊（第5学年用、第6学年用）と各々の「指導資料」に提示されている語彙と英文であり、本稿での『英語ノート（試作版）』という表記には「指導資料」も含むと理解されたい。

で使用された英文に含まれる全ての語を扱うこととする。データベース作成においては、KUIS 語彙リスト作成の手順に倣い、英文内での使用法を基に、品詞や用法を比較できるような試みを含んでいる。

また、先に述べたように、先行研究である KUBEE1850、中條他リスト、KUIS 語彙リスト（以下これらを合わせて「子ども用リスト」とする。）の共通語である約 450 語は、早期英語教育にとって核となる語であろうという判断から、『英語ノート（試作版）』での出現語彙と子ども用リストでの比較を行うために、『英語ノート（試作版）』での総語数 666 語のうち、子ども用リストで扱われている 5 品詞のみを抽出し、339 語¹⁴を対象語とした。

3.2 『英語ノート（試作版）』と他のリストとの品詞割合比較
先ず、『英語ノート（試作版）』と子ども用リストとの品詞割合を比較してみよう。それをまとめたものは、表 1（次頁参照）である。一般に、言語習得段階の初期においては、名詞の割合が高くなるのだが、両リストにおいてもその傾向が見られる。しかし、特筆すべきは、『英語ノート（試作版）』における名詞の占める割合の高さであろう。子ども用リストでは 60%未満なのに対し、『英語ノート』では 70%以上の語彙が名詞であり、それと反比例して述語系（動詞、形容詞）の語彙の割合が少なくなっている。特に、動詞の数が 11%余りの 38 語というのは、限られた動詞のみが出現していることを示していると言えるだろう。

¹⁴ 注 10 でも述べたように、機能語や固有名詞、上位語、アルファベット、数の表現は、子ども用リストの比較の際に削除をしている。同条件での比較を行うため、『英語ノート（試作版）』の出現語彙からもこれらを除き、その結果 343 語を得た。

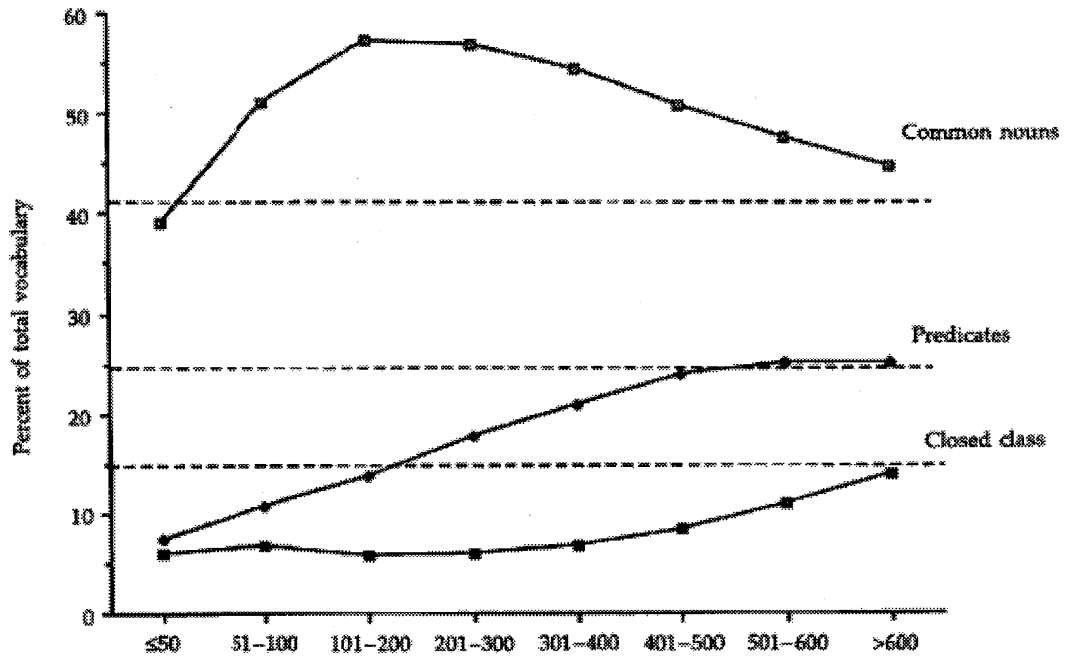
(表 1) 『英語ノート (試作版)』と子ども用リストの品詞割合比較

品詞	英語ノート(試作版) 339 語	子ども用リスト 455 語
名詞	74.0% (251 語)	58.9% (268 語)
動詞	11.2% (38 語)	20.9% (95 語)
形容詞	8.9% (30 語)	12.3% (56 語)
副詞	4.1% (14 語)	4.8% (22 語)
前置詞	1.8% (6 語)	3.1% (14 語)

言語習得の初期に名詞の割合が高いというのは、母語習得にも当てはまり、Bates, et. al (1995) (図 2; 次頁参照)には、英語を母語として習得する段階の品詞 (普通名詞、動詞などの述語、機能語などの閉じたクラスの語) の割合が、総語数との関係でグラフ化してある。この図によると、総語数が、『英語ノート (試作版)』に表出する語彙数 (350 語) 程度の発達段階では、名詞割合は約 55%、動詞割合は約 20%とのことであり、確かに名詞の割合は高い。しかし、この母語習得過程と比較しても、『英語ノート (試作版)』に出現する名詞の割合が圧倒的に高いと言えよう。母語習得の発達段階では、100 語から 200 語程度の最も名詞の割合が高い時期であっても、その割合は約 60%を下回るにとどまっており、名詞が総語数の約 70%を占めるといいう時期はない。つまり、『英語ノート (試作版)』での出現語彙は、第一言語の語彙習得の観点から見ても名詞の割合が非常に高いのである。

(図 2) Bates, et. al (1995)

Figure 4.8 Vocabulary Composition as a function of vocabulary size on the MacArthur CDI Toddler Scale.



この、名詞の割合が特段に高いという『英語ノート（試作版）』の特徴は、成人の英語学習者用語彙リストに出現する名詞と動詞の割合とを比較した表 2 から明らかである。

(表 2) 『英語ノート（試作版）』と JACET リスト（2005）の名詞・動詞割合比較¹⁵

品詞	『英語ノート (試作版)』 339 語	JACET1000 1315 語	JACET2000 1223 語
名詞	74.0% (251 語)	44.6 % (586 語)	52.6 % (643 語)
動詞	11.2% (38 語)	28.6 % (376 語)	23.6 % (289 語)

¹⁵ JACET リストでは複数の品詞が付されているため、異なる品詞を異語と扱くと JACET1000 レベルには 1434 語、JACET2000 レベルには 1238 語が収録されている。この語数を子ども用リスト同様の 5 品詞のみにするとそれぞれ 1315 語、1223 語となるため、この語数での比較を行った。

これらの結果を総合的に判断すると、言語習得初期の段階には名詞の割合が高いという傾向は、どの語彙リストにおいても確認でき、その意味では、子ども用語彙リストでも、JACET1000/2000でも、学習者の言語発達段階に対応した語彙選定がなされていると言えそうである。しかし、『英語ノート（試作版）』では、その特徴がより極端に示されており、結論とするには時期尚早かもしれないが、小学校英語活動では、文法などの英語の知識の明確な導入を避けつつ、「英語に触れさせる」ためには、とにかく「名詞」を数多く導入することしかできないのかもしれない。以下でより詳しく述べるが、動詞を使うということは、文を作らねばならない。そして、文を作るためには、文法は避けて通れない。しかし、文を文法規則に従って作られるものとして扱うのではなく、丸ごと覚える対象（いわば「定型表現」の一種）として扱い、文法の導入は行わないとする方針の下では、「定型的表現」として扱える動詞の数（文の形）を限り、その表現の主語や目的語（以下で述べるが、主語はほとんどが1人称であるため、入れ替え可能性が高いのは目的語）となる名詞を数多く入れることにより英語活動を行う、ということしかできないと言えそうである。つまり、名詞の割合が極端に高いという事実からだけでも、『英語ノート（試作版）』で想定している小学校で導入される「英語のカタチ」がある程度、見えてくると思えるのである。¹⁶

3.3 『英語ノート（試作版）』と子ども用リストとの重複度

本節では、『英語ノート（試作版）』における名詞と動詞の割合の傾向をより詳細に理解するために、子ども用リストとの重複度を分析する。これにより、それぞれのリストにおける

¹⁶ 実際、この「推測」が当を得ているか否かについては、今後の課題としている『英語ノート（改訂版）』における文型の調査で報告したい。

両品詞の割合を知るだけでなく、どのような語彙が選定されているかがより明らかになるものと思われる。

(表 3) 『英語ノート (試作版)』と子ども用リストの名詞・動詞重複度

品詞	『英語ノート (試作版)』 339 語	KUIS 語彙リスト 956 語	石川リスト 1674 語	中條他 リスト ¹⁷ 1280 語
名詞	251 語	60.6% (152 語)	53.0% (133 語)	70.9% (178 語)
動詞	38 語	84.2% (32 語)	89.5% (34 語)	97.4% (37 語)

表 3 は、『英語ノート (試作版)』収録の 339 語と子ども用リストの収録語のうち重複している語数とその割合を算出したものである。つまり、名詞については、『英語ノート (試作版)』の名詞 251 語のうち、152 語が KUIS 語彙リストで、133 語が石川 (KUBEE) リストで、178 語が中條他リストと共通しているのである。同様に、動詞については、『英語ノート (試作版)』では、38 語しかないのであるが、そのうち 32 語が KUIS 語彙リストで、34 語が石川 (KUBEE) リストと 37 語が中條他リストと重複している。つまり、動詞は、名詞に比べ圧倒的に重複度が高く、『英語ノート (試作版)』の動詞は、数は少ないが、それらは、児童英語の語彙としては非常に基本的な語彙であると言える。

各々のリスト中の名詞は、総語数に対する割合が高いにもかかわらず、これらのリストの間では重複度は 53~71%と、それほど高いとはいえない。これは、早期英語教育用の教材がトピックを重視して構成されており、扱うトピックが異なれば、自ずと導入する名詞が異なることになるためと考えら

¹⁷ 脚注 11 でも述べたように、中條他の語彙リストは品詞情報が得られないため、適切と思われる品詞を付与して共通語彙数・割合を算出した。

れる。

名詞との重複割合に対し、動詞は同様の条件下であっても非常に高い重複度を示しており、子どもに対して導入しようとする動詞は非常に限定されたものであると思われる。さらに動詞は、文の核となるため、当然のことながら導入される文のタイプも限られていると推測できる。

では、早期英語において導入される動詞はどのように限定され、また導入されている文のタイプはどのようなものなのであろうか。この問いに答えるため、以下では表3から明らかとなった事実——つまり、『英語ノート（試作版）』に出現する動詞は、他の早期英語用のリストと重複度が非常に高く、子供への英語導入初期には基本となる動詞である——を受け、『英語ノート（試作版）』に焦点を当て言語学的な観点から考察し、そこに表出する英語・英文の特徴を明らかにしたい。

4. 『英語ノート（試作版）』に出現する動詞の特性

4.1 動詞の意味タイプ

言語学的観点から動詞を分析する方法の1つとして、その意味タイプによる分類があり、本研究では Vendler (1967) による分類方法を採用する。¹⁸この分類は、動詞の意味タイプを文中で果たす役割によって、「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」、「状態動詞」の4種類とするものである。活動動詞は主語の（意図的な）動作が継続する様子をあらわし、swim のような自動詞や study のような主語の行為を表す他動詞を含む。達成動詞（例えば他動詞の break や make）は、主語の何らかの行為により引き起こされた目的語の状態変化を表す。

¹⁸ Vendler (1967)の研究は古典的なものだが、動詞の分類に関しては、この分類法が、日本語を含め他の言語についても有用であることは理論言語学の分野で広く認識されており、この観点から文を考察することは、言語現象の把握（ひいては文法の整理）に有用である。

例えば、*He broke the vase* という文は、彼が花瓶に対して何らかの行為を行った結果、それが粉々に壊れてしまったという事態を描写している。これらの達成動詞は、主語の意図的な行為を含むという点では上記の活動動詞と共通するが目的語に変化が及んでいるという点では、単純な活動動詞以上に複雑な事態が含意されている。到達動詞には *go*、*come*、*grow* のように、主語の位置や状態の変化を表す自動詞が含まれ、状態動詞は *be*、*have*、*want* など主語の物理的もしくはは心的状態を表す自動詞や他動詞を含んでいる。各々の動詞が構築する文型は表4のようになり、各動詞の例文は(1)に示してある。

(表4) 動詞の意味タイプとその文型

動詞のタイプ	文型	例
活動動詞	SV, SVO	<i>swim, study</i>
達成動詞	SVO	<i>make, break</i>
到達動詞	SV	<i>go, come, grow</i>
状態動詞	SVC, SVO	<i>be, have, want</i>

- (1) a. *John swims.* (活動動詞)
 b. *John broke the vase.* (達成動詞)
 c. *John went home.* (到達動詞)
 d. *He is a student.* (状態動詞) (cf. Vendler (1967))

4.2 『英語ノート (試作版)』に出現する動詞の意味タイプ分析結果

上記の意味タイプによる分類で、『英語ノート (試作版)』に出現する動詞 43¹⁹語を分析すると、活動動詞の割合が最も多

¹⁹ 本節においては、他の子ども用リストとの比較ではないため、『英語ノート (試作版)』に出現する動詞総数 43 語により分析を行った。先の分析に使用した 38 語に加え、*be*、*am*、*is*、*are* の 4 語、さらに *see* が 2 種の意味タイプを持つゆえ異語と扱い、計 43 語とした。*be* 動詞の形態の違いを別の述語として扱った理由は、『英語ノート (試作版)』では、文法的な説明は行わないでこれらが提示されているため、生徒にとっては、別の動詞と

く約 50%、次に状態動詞が約 30%を占めるのに対して、到達動詞は約 10%、達成動詞は約 0.5%しか使用されていないとの結果が得られた（表 5）。（なお、『英語ノート（試作版）』に出現した動詞と具体例は本稿末尾の資料を参照されたい。）

（表 5）『英語ノート（試作版）』の出現動詞の意味タイプ割合

動詞の意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	22	51.2	help, play, run, walk
達成動詞	2	4.7	clean (他動詞), make
到達動詞	5	11.6	come, get, go, grow, turn
状態動詞	9	20.9	be, like, have, want
その他の動詞	5	11.6	meet*, thank*
計	43	100.0	

*nice to meet you に用いられる meet や thank you の thank

また、実際に『英語ノート（試作版）』に現れた例文には(2)のようなものがある。

- (2) a. I can *swim*. / I *study* Japanese. (活動動詞)
 b. Can you *make* an omelet? / I *clean* the room. (達成動詞)
 c. I *go* home. / I want to be a doctor, when I *grow* up.
 (到達動詞)
 d. I *have* a red cap. / My name *is* Ken. (状態動詞)
 (上記の例は全て『英語ノート（試作版）』より。
 斜体は筆者による。)

このように、活動動詞が出現動詞のうち最も多く、4つの達成述語を含めると 50%以上（43 語中 24 語）が主語の意図的な動作を示す動詞である。意図的な動作を表す文ということは、有生物が主語となる文である可能性の高いことを推測

認識されている可能性が高いと思われるからである。初学時における be 動詞の扱いについては、助動詞としての機能も含め、今後の課題としたい。

させる。

この推測が確かなものであるかを検証するため、各動詞の意味タイプ別に、これらを含んだ文の主語が有生物か無生物かという観点から分析を行った。表6がその結果である。なお、ここでは、(猫やライオンなど)動物が主語の場合は、有生物主語として分類してある。

(表6) 意味タイプ別動詞に対する主語の相違割合

動詞のタイプ	文総数	無生物主語	有生物主語
活動動詞	158	0 (0.0%)	158 (100.0%) うち1人称 94例
達成動詞	5	0 (0.0%)	5 (100.0%) うち1人称 4例
到達動詞	31	1 (3.2%)	30 (96.8%) うち1人称 24例
状態動詞 (be動詞以外)	154	0 (0.0%)	154 (100.0%) うち1人称 109例
状態動詞 (be動詞)	387	195 (50.4%)	192 (49.6%) うち1人称 151例

この結果から、be動詞を含む文を除き、全ての意味タイプの動詞において、無生物主語に比べ有生物主語の割合が非常に高いことが分かる。さらに有生物主語のうち、人称の出現度を分析したところ1人称の使用例が非常に高いことも知ることができた。活動動詞や達成動詞そのものは、**The car ran fast.**や**The sad news broke his heart.**などのように無生物主語を許し、大人の発話においてはこうした例は現れることがあるが、『英語ノート(試作版)』においては、このような無生物主語が活動動詞や達成動詞と共に出現する例は皆無である。

なお、上述の表5では、活動動詞が状態動詞に比べ非常に高い出現率を示したにもかかわらず、この分析結果では、be動詞以外の状態動詞の使用例が活動動詞とほぼ同数を示す結

果となっている。これは、I want to be～のようにチャンク的な表現が多用されているためであり、使用例は多いものの使用されている語が限定されていることによるものである。

また、状態動詞の一つである be 動詞の使用例では、有生物主語に比べ、若干ながら無生物主語の使用例が多い。これは、What's this?の質問文とそれに対する答えの It's a pen.あるいは What's your name?の質問文とそれに対する My name is Ken.のように教室内で頻繁に行われる活動のための表現に無生物主語の文が多用されているためである。よって、状態動詞としての be 動詞が無生物主語と共に使用されているのは、ごく限られた用法であるため、この意味タイプの動詞に関しても有生物主語が多いとして良いと思われる。

『英語ノート（試作版）』に出現する動詞は、これらの分析結果から、活動動詞中心で 1 人称の有生物主語と共に文中に用いられるという特徴が明らかとなった。

5. おわりに

これまでの分析結果をまとめると、『英語ノート（試作版）』は、いくつかの先行研究で提示された他の子ども用語彙リストに比べ、名詞割合は多いが動詞の割合が非常に少なく、その動詞の多くは活動動詞であることが示された。また、活動動詞は大部分が 1 人称の有生物主語と共に使用されるとの結果も併せて得られた。これは、小学校での英語教育の目標が「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り（中略）コミュニケーション能力の素地を養う」ものであることを十分に反映しているものと思われる。

まず、名詞の割合が多いのは、小学校での「英語教育」においては文法や文型・構文を意識せず、語のレベルで英語を導入し、英語を用いてのコミュニケーション（情報のやり取り、自己表現）の素地を養うために、生徒各々が体験的に英

語に触れることを反映したものであると考えられる。名詞は、母語習得における子どもの初期の語彙発達においても、動詞に比べ獲得が容易であるとされている(小椋, 2007)。それは、子供の言語活動が、自らの周りの事物の「名付け」や、周囲の大人の問いかけに答えることから始まることと無関係ではないであろう。すなわち、名付け行為は、「名詞」の導入を促し、問いかけへの答えは、提示された文の「何、what」「誰、who」、「いつ、when」や「どこ、where」といった疑問詞に対応する要素(多くの場合は、名詞を含む表現)の使用を必要とする。名詞に対し、動詞は、必然的に「文」の構築を促し、表4で示したように、動詞に対応した文型・構造(つまり、文法)の導入は避けて通れない。文法を最低限に抑えつつ、コミュニケーションの素地を養うことを目指すなら、必然的に「名付け」と「疑問詞」と対応する名詞を、会話の場に応じて提示する活動が中心とならざるを得まい。結果として、動詞は、自らの行為を表現する1人称主語の活動動詞程度(活動内容的には、生徒自身の行為の表明)に抑え、それに関わる文型(SV、SVO構文程度)は定型表現扱いで乗り切ることになる。そして、その定型表現の名詞部分(多くの場合目的語)を入れ替えることで成り立つ言語活動を中心とすると思われる。

上記の考察から、『英語ノート(試作版)』の語彙を、言語学の知見を取り入れながら、その品詞割合と動詞の意味タイプを考察することで、この『ノート』がどのような「英語」を導入することになるか、ある程度明らかになったと思われる。つまり、周囲の事物に対応する名詞を数多く学び、大人(教師)の定型的な文構造を持つ「疑問詞疑問文」への名詞を含んだ表現で答えることができ、自らの動作と関わる表現を提示することができるようになる、といったものである。ただ、本研究では、状態述語(特にbe動詞)を用いた構文に

については動作動詞ほどの考察には至らなかった。状態述語は「名付け」と同時に、事物の状態（色や形、大きさなど）を表現できる。そうした表現で得られる文の構造やカタチについて明らかにすることができれば、小学校で導入される「英語のカタチ」をもう少し具体的にすることができよう。それは、今後の課題としたい。

『新小学校学習指導要領』の目的で明らかのように、小学校では英語の知識の導入は視野に入っていない。当然、『英語ノート』には、子どもが使用することが期待されている表現でも、教員が用いる表現でも、どのような文型・構文が用いられているかが体系的に記述されているわけではない。であるから、『英語ノート』を、本論文で示したように、文型や文のタイプ・性質の観点から「分析」することは、小学校英語教育で求められていることではなく、「本筋を見誤る」との批判の可能性もあろう。しかし、こうしたテキストを用いて得られるであろう「英語の特質やカタチ」を（少なくとも教員や英語教育関係者が）把握しておくことは、非常に意味あることと確信する。

言語は、どの言語であれ、一定の体系を持っており、語彙（特に述語）のタイプと文のタイプは必然的に連動していることが言語学の研究で明らかになっている。Vendler に言及して表 4 で提示した動詞の意味タイプと文型との関連は、そうした知見の一端である。上述したように、『英語ノート（試作版）』に表出する語彙を調査することで、そこに表出する文のタイプが明らかにできた。つまり、このテキストにより、ということが英語で表現できるようになるかが、活動の内容だけでなく、英語の体系の観点からも明確にできたのである。しかし、本研究の示唆する所は、それだけに留まるわけではない。何ができるようになるかを動詞の意味タイプとそこから必然的に派生する構文や文法の観点から明らかにするとい

うことは、そうした語彙からでは表出することができない文タイプをも（ある程度）明らかにできることを意味する。表5や表6からだけでも、『英語ノート（試作版）』にはほとんど現れない達成動詞や到達動詞と関わる文表現や、1人称以外の主語を持つ構文、特に、無生物主語の構文などは、小学校での英語では導入されていないのである。そうした構文も、英語全体の体系や英語が持つ表現力の観点からは、いずれ（中学校、高校などで）導入されなければならないものである。

また、より詳しくは今後の研究に譲るが、小学校での英語活動が、コミュニケーション重視の観点から、かつ、英語の知識と関わる説明は可能な限り避けるとの方針により、必然的に、眼前の具体的（つまり「Here & Now」）の事象の表現や伝達に限られることから、文法の観点で言えば、最も「難しい」とされる「時制や相」と関わる助動詞や、複雑な思考の表明を可能にする従属節を取り込む複文構造（いわゆる、目的節、関係節、副詞節、分詞構文、不定詞、などを含んだ文）もほとんど扱われていない。『英語ノート』で獲得できる可能性のある事項を明らかにしつつ、同時に、それでは到達できない文法や構文を明確化しておくことは、英語導入の出発点であり土台となる小学校での英語教育と、英語の知識の習得も視野に入れることになる、中学校とそれ以降の英語教育の有機的な連携を計画する上でも重要なことである。小学校での英語導入でできるようになることを中学校以降でも十全に生かされることが望まれる。しかし、同時に、そこで到達することが難しいであろう英語の側面を認識することが、中学以降の効果的な英語教育に必要であらう。

参照文献

- Bates, E., Dale, S. P., & Thal, D. (1995). Individual Differences and their Implications for Theories of Language Development. In Fletcher, P. & MacWhinney, B. (ed.), *The Handbook of Child Language*. pp. 96-151. Cambridge: Blackwell.
- Cameron, L. (2001). *Teaching Language to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hindmarsh, R. (1980). *Cambridge English Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mckay, P. (2006). *Assessing Young language Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rixon, S (1999). Where Do the Words in EYL Textbooks Come from? In Rixon, S. (Ed.), *Young Learners of English: Some Research Perspectives*, pp. 55-71. Essex: Pearson.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- 石川慎一郎 (2006). 「小学校英語教育のための語彙選定の視点：L1/L2 コーパスに基づく発信型語彙表の開発」全国英語教育学会第 32 回高知研究大会（於高知大学）口頭発表、2006 年 8 月 6 日。
- 今井むつみ、針生悦子 (2007). 『レキシコンの構築－子供はどのように語と概念を学んでいくのか』東京：岩波書店。
- 小椋たみこ (2000). 「マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の標準化」『平成 10 年度～11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』:神戸大学。
- 小椋たみこ (2007). 「日本の子どもの初期の語彙発達」『言語研究』132, pp. 29-52.
- 神谷昇、町田なほみ、長谷部郁子、長谷川信子 (2008). 「『英語ノート（試作版）』の語彙の特徴－品詞と意味の観点から－」

- 語彙研究フォーラム 2008－第 1 回 JACET リーディング研究会・英語語彙研究会合同大会（於関西学院大学）口頭発表、2008 年 12 月 7 日.
- 大学英語教育学会(JACET) 基本語改定委員会（編）(2005). 『大学英語教育学会基本語リスト(JACET List of 8000 Basic Words)』東京：大学英語教育学会（JACET）.
- 中條清美、西垣知佳子、西岡菜穂子、山崎淳史、白井篤義 (2006). 「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学部研究報告 B』39, pp. 79-109、日本大学.
- 西垣知佳子、中條清美(2008). 「小学校『英語ノート』の語彙」第 34 回全国英語教育学会東京研究大会（昭和女子大学）口頭発表、2008 年 8 月 10 日.
- 町田なほみ、小林美代子、長谷川信子(2008). 「早期英語教育のための語彙リスト開発過程」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』7, pp. 241-268.
- 山本麻子(2005). 『子どもの英語学習－習得過程のプロトタイプ－』東京：風間書房.

参考資料

- 『英語ノート（試作版）』5 年生、6 年生. (2008) 文部科学省.
- 『英語ノート指導資料（試作版）』第 5 学年、第 6 学年 (2008) 文部科学省.
- 『新小学校学習指導要領』第 4 章 外国語活動. (2008) 文部科学省.

資料：『英語ノート（試作版）』に使用される動詞と例文
 （アルファベット順；例文のイタリックは筆者らによる）

活動動詞（動詞数：22）

buy	I <i>bought</i> it in Korea.
do	Let's <i>do</i> the chant in a loud voice.
eat	I want to <i>eat</i> pizza.
fly	I can <i>fly</i> .
help	Please <i>help</i> me.
look	Grandma: <i>Look</i> at this.
play	I <i>play</i> baseball.
pull	Grandpa <i>pulls</i> the turnip.
ride	I can <i>ride</i> a unicycle very well.
run	My white horse, you can <i>run</i> fast.
say	Mama <i>says</i> , mama <i>says</i> , "Go to bed."
see	I want to <i>see</i> camels in the desert.
sing	I can <i>sing</i> my ABC.
speak	I can <i>speak</i> Japanese.
stop	Go straight and <i>stop</i> .
study	I <i>study</i> Japanese.
swim	I can <i>swim</i> .
take	I <i>take</i> a bath at 8:00.
teach	I <i>teach</i> music at school.
walk	I want to <i>walk</i> on the moon.
watch	I <i>watch</i> TV.
work	I <i>work</i> in a hospital.

達成動詞（動詞数：2）

clean	I <i>clean</i> the room.
make	I can <i>make</i> an omelet.

到達動詞（動詞数：5）

come	<i>Come here.</i>
get	I <i>get</i> up at 7:00.
go	I want to <i>go</i> to Italy.
grow	I want to be doctor, when I <i>grow</i> up.

状態動詞（動詞数：9）²⁰

am	I'm fine / happy / hungry / sleepy.
are	How <i>are</i> you?
be	I want to <i>be</i> a soccer player.
have	I <i>have</i> a red cap.
hope	I <i>hope</i> that you are, too.
is	My name <i>is</i> Ken.
like	I <i>like</i> baseball.
love	I <i>love</i> you, my good friend.
want	I want to go to Italy.

その他の動詞（動詞数：5）

（「その他」に含まれる動詞は以下に示すが、これらは明らかに「定型表現」の一部として表出していると思われ、意味分類の対象とはしなかった。）

done	Well <i>done</i> !
let	<i>Let's</i> do the chant in a loud voice.
meet	Nice to <i>meet</i> you.
see	<i>See</i> you.
thank	<i>Thank</i> you.

²⁰ 注19でも述べたように、be動詞については、人称の違いによるもの3つ（am, is, are）と原型（be）の4つを、ここでは、別の述語として扱った。これらを一つの動詞と捉えれば、状態動詞の数は6つとなる。

(神谷)

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

nkamiya@kanda.kuis.ac.jp

(長谷川)

神田外語大学

大学院言語科学研究科

hasegawa@kanda.kuis.ac.jp

(町田)

神田外語大学

言語科学研究センター

nahomijp@kanda.kuis.ac.jp

(長谷部)

162-8656

東京都新宿区戸山 3-20-1

学習院女子高等科

ikukolcs@yahoo.co.jp